

宇留田敬一先生に学ぶ

都立教育研究所主任指導主事 中野目 直 明

宇留田敬一先生が、今春筑波大学を退官されるとお聞きして感慨無量なるものがある。2月6日の土曜日午後、大塚学校経営研究会で久しぶりにお目にかかってお元気な様子を拝見し、気持はお若くとも退官する年令には見えないなと思った。その折、筑波大学の小島先生から宇留田先生の思い出を書いて欲しいと依頼され、その任ではないと考えたが宇留田先生には長い間お世話になっているので、ご期待に沿い得る内容は書けないがお引き受けすることにした。

私が宇留田先生と初めてお会いしたのは、昭和30年の中野十中時代であり、現在にいたるまでかなりの年数を経過しているが、ここでは中野十中時代を中心に、教育委員会時代、学者としての先生等の各テーマを取り上げて先生の思い出、人がらを述べてみたい。

1. 中野十中時代

私が宇留田先生と初めてお会いし、その後暫らくの間ご一緒に仕事をした時代であり、宇留田先生の印象は強烈であった。私は福島県立高校に2年間勤務して、昭和30年に上京して初めて赴任した学校が中野十中であり、そこで出会った教頭が宇留田先生であった。

私は中野十中とはどんな学校かはよく知らなかったが、宇留田教頭のことは事前を知ることができた。新聞紙上で青年教師の会の会長として、たしか座談会だと思ったが、写真入りで報道されているのを見ていたからである。当時、宇留田教頭は30代前半の若手の教頭であり、おそらく都内でも最年少の若さではなかったろうかと思う。張り切った優秀な教頭さんのいる学校だなというのが私の中野十中に対する予備知識だったのである。

中野十中時代の思い出として残っていることをいくつか述べてみたい。

(1) 新任教師への注意

中野十中は新設間もない中学校だったので、私が就職したとき10数名のものが一緒に入ったのである。初めて学校に行ったとき、私たち新任教師は宇留田教頭に呼ばれて教師としての心がまえを教えてもらったことがある。その際、先生が服装について話をされた。“服装は先生として恥づかしくないように、きちんとしなさい”といわれ、かなり細かい点まで注意をされた。

私はいくつかの学校の経験があるが、着任した際、このように服装その他について細かく話が

あったのはこのときだけのように思う。よく気をつく教頭先生だなという印象を受けたのを覚えている。

(2) 若い教師とのふれ合い

当時、中野十中は20才代の若い教師が大多数であり、意欲や元気があったがいわゆるベテラン教師は少なく、これらの若い教師をリードしていく教頭の仕事は大変だったと思う。先生は、職務上のフォーマルな人間関係はもちろんのこと、レクリエーションや夜の酒のつき合いなどインフォーマルな人間関係を大切にされていたように思う。教頭職は非常に多忙なポストであるが、若い人々と大いに飲み、かつ議論していた宇留田先生の姿をよく目にしたものである。

(3) 飾らない人から

したがって、宇留田先生は若い教師から人気があった。宇留田先生はまた飾らない人からを持っていた。先生は中野十中のあと、都の指導部の指導主事、文部省の教科調査官、都立教育研究所の相談部長、指導部の課長等を歴任されたが、一貫していつも変わらない態度であったように感じられた。先生は重要な地位につかれても権威をふりかざすことなく、いつも学究的な姿勢と飾らない人間味ある人からで終始されていた。

先生の研究的実績や教育者として行政官としての実績もさることながら、人間味のある飾らない人からが、先生に対する尊敬を長い間にわたって継続し、先生をめぐる多くの教師が集まることになったのであろう。

2. 都教委時代

都教委時代、先生は、指導主事として、都研の部長として、あるいは指導部の課長として活躍された。そのころの思い出として、三つあげてみたい。

(1) 研修会で先生の講演をおききする機会があった。テーマは、生徒指導についてであった。実に明快な論旨で、首尾一貫して整理して話をされていた。その講演のメモがそのまま、本や雑誌の論文の内容となってもよいようにきちんとして筋道を立てて話されるのでよく理解できた。先生の話は、このように論旨が明快であり、実践をふまえながらも理論的裏づけが十分になされていることが特色であった。

(2) あるとき、先生が訪ねてこられて、誰かにネクタイを借りた思い出がある。たしか、卒業式に指導主事として出席するのに、ネクタイを忘れてきてしまったというのである。誰かのを借りて、式に参加されたのである。これは先生がそっかしい一面があったことと、またおおらかな性格であったことを物語っていると思う。

(3) 当時、先生から私の進路について助言をいただいたことを覚えている。私が高等学校に勤務していたとき、他の高校に転任することを何かの会合でお会いした席で相談したのである。その折、先生は“将来の自分の進路は何なのかをよく見通して、考えなさい。”という意味のことを言

われたのを覚えている。先生の助言を受けて、私は今まで目先のことにとらわれていたように考え、広い視野から自分の進路をじっくり検討したのである。先生が私に助言されたことが、一つのきっかけとなって、私はその後指導主事となり都研に入って研究生生活を続けることになった。今、考えて見ると、当時の宇留田先生の助言は、将来の方向がはっきりと把握されなかった私にとって、的確なそして力強いアドバイスであった。その点で、私のその後の方向を決めるのに有益な示唆を与えてくださった先生に感謝の念を禁じ得ないのである。

3. 学者としての宇留田先生

最後に、学者としての先生について述べてみたい。先生は長い教職生活の最後のラウンドを学者として過ごされている。教育者としては、非常に恵まれたコースを歩まれたのではなかろうか。中学校の教師を振り出しに、教頭、指導主事、教科調査官、研究所の部長、指導部の課長ときわめて多彩な経歴のあとで大学教授となられた。学者の中でも、これだけの多彩な経歴の持主は少ないのではないだろうか。この点は、学者としての先生の大きな強味であると思う。教育に関する学問は、教育実践を対象とすることから、特に実践的性格が強い。先生のように、かって教育実践の第一線にあり、教育研究を体験し、教育行政の世界でも指導的地位にあった人が、学者として活躍されるのは、非常に喜ばしいことである。教育実践をよく理解している貴重な学究として、学校、教職員の期待が大きいと思う。

次に、先生の専攻分野は生徒指導、特別活動であるが、現在最も注目を集めている分野であることがあげられる。

先生の労作として、「生徒指導の手引」文部省、「集団活動の理論と方法」明治図書等がある。特に「生徒指導の手引」は、まさに生徒指導の基本的文献といえる。先生は、かって中学校教師のころ、ホームルームの研究を手がけられ、著書も出された。わが国ではホームルームに関する最初の文献とも聞いている。それ以後、先生は一貫して生徒指導、特別活動の分野の研究と実践に取り組まれ今日に至っている。

生徒指導に関する先生の著作には、いつも子供が存在していることが特色である。子供がいつも中心にある研究論文である。ここが、先生が実践者から出発した学者である特色であり、個性であろう。どちらかといえば、生徒指導、特別活動の分野は、現在でこそ多くの研究者が出てきているが、今までは大学の研究者は少なく、実践家が多く理論の体系化が実践に追いつかなかった面もあるように感じられた。

宇留田先生が、実践に基盤をおいた生徒指導の理論の体系化を推進されることに、多くの人々の期待が集まっていると考える。校内暴力が新聞紙上に取り上げられ、生徒指導が重要な教育課題とされているとき、先生が学者として教育界から期待されている役割は非常に大きいと信じている。先生の一層のご健康とご活躍を心からお祈りして、小生の思い出の記を終わります。